平成二十八年度入学試験問題

国　語

注　意

一　問題冊子は一冊（14ページ）、解答用紙は二枚、下書き用紙は一枚です。
二　試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により解答できない場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
三　すべての解答用紙に、それぞれ二箇所、受験番号を算用数字で記入しなさい。
四　解答は、すべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
五　試験終了後、問題冊子と下書き用紙は必ず持ち帰りなさい。

問題　一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

昆虫をはじめとした動物性の食料は、霊長類のほぼすべての栄養を満たす優良な食べ物であり、昆虫は重さあたりのエネルギー量が大きい。そのため、体重あたりに必要なエネルギー量が大きい小型の動物にとって、昆虫食はベストの選択である。消化しやすく、得られるエネルギー量が大きいからである。しかし、体サイズの大きな動物にとって、栄養を賄うだけの大量の昆虫をさがすのは困難である。もちろん大量に得られるシロアリやアリという社会性昆虫を専門的に食べるのは食性の進化としてひとつの選択であり、南米のアリクイ類、アフリカのツチブタ、アジア・アフリカのセンザンコウ類、オーストラリアのフクロアリクイなど、どこの大陸でもアリやシロアリの専食者としての哺乳類は存在する。しかし、霊長類は(1)その道を歩まなかった。小型霊長類は必要なエネルギー量を得るだけの昆虫を獲(と)ることが可能であるが、社会性昆虫以外では中大型霊長類の必要量を満たすだけの昆虫を日常的に採取することは困難である。

一方、昆虫と異なって、葉は森林ならどこにでも大量に存在する。光合成にはタンパク質が必要なので、葉にはかなりのタンパク質も含まれている。しかし、植物は構造を保つためにセルロースを多量に含み、被食防御のためにタンニンをはじめとした二次代謝物質を葉に含ませている。これらの物質は葉を消化しにくい食べ物にしている。また葉は果実や昆虫に比べると、重さあたりのエネルギー量は少ない。しかし、大きな動物は小さな動物ほど、体重あたりのエネルギー量を必要としないため、重さあたりのエネルギー量の少ない葉を食べ物としても生きていける。また、なによりも大きな動物は大きな消化管で豊かな腸内細菌叢(そう)を養っていくことで、セルロースなどの難分解物質あるいはタンニンなどの毒物を微生物の酵素の働きで消化・無毒化することができる。

このため、(2)霊長類のなかで昆虫食か葉食かを決定づける生態学的な要素は体重である。鳥類でもスズメ目をはじめとした小鳥はおもに昆虫食と果実食の混合であり、大型のガン・カモ類は草食を主とするものも存在する。霊長類では体重五〇〇グラムが

注一　漢文帝絶献者而不受＝漢の文帝が、千里の馬を献上された際に、自分一人が先を行っても意味がないと述べて、受け取らなかった故事。ここでは、馬が不遇である例として用いられている。

注二　武帝喜得之而作歌＝漢の武帝が、西域の大宛(だいえん)国に名馬を産すると聞き、二度にわたる遠征の末にやっと入手し、歌を作って喜んだ故事。ここでは、馬が厚遇される例として用いられている。

注三　優遊六閑＝厩(うまや)でゆったりと過ごす。「六閑」は厩をいう。

注四　食粟一石＝「一石」は約百リットル。千里の名馬は一日に一石の大量の粟（穀物）を餌として食べると考えられていた。

注五　毫縑＝絵画をいう。「毫」は絵筆、「縑」は絵を描く絹。

注六　微＝精緻で深遠なさま。

問一　傍線部(1)をすべて平仮名で書き下し文にしなさい。

問二　傍線部(2)を現代語訳しなさい。

問三　傍線部(3)を現代語訳しなさい。

問四　傍線部(4)について、筆者が「千里馬図賛」を作ったのはなぜか、説明しなさい。

問題　四

次の文章は、一日に千里を走る名馬（千里の馬）を描いた絵画を元の蘇天爵が称えた文章「千里馬図賛（千里の馬の図の賛）」の序文である。これを読んで、後の問に答えなさい。（設問の都合上、送り仮名を省略した所がある。）

馬以千里名、奇馬也。物之奇者、世不常有。有則、見奇(1)

於世、亦宜矣。然漢文帝絶献者而不受、武帝喜得之而注一

作歌。其遇不遇、蓋如此。嗟夫、優遊六閑、食粟一石、備注二注三注四

乗御者、又不必皆奇者也。乃独有善画者、得神駿之意、

而寄諸毫縑焉。噫、亦微矣。夫画者之難得、有甚於馬注五注六(3)

之難得。而知画者、亦不減知馬者之難能。故為千里(4)

馬図賛。

（蘇天爵『滋渓文稿』による）

昆虫食と葉食のブンキ点だといわれていて、提唱者の名前をとって「ケイの閾値」と呼ばれている。注一

わたしたちに一番近縁な類人猿はどうだろうか。アジアの類人猿であるオランウータンとテナガザル類は果実食者で葉も多く食べるが、採食時間の数％程度はアリやシロアリを食べることがほとんどすべての調査地で知られている。アフリカの類人猿ではゴリラはアリをごく稀に食べる程度であるが、チンパンジーやボノボではかなり頻繁に食べる。チンパンジーが道具を使用してシロアリやアリを効率的に採集することはよく知られている。またボノボも季節によっては、樹木の葉を食べるさまざまなチョウ目の幼虫をかなりの時間をかけて食べ、稀に川底を漁ってトンボ類のヤゴを食べることもある。アフリカ類人猿のなかでゴリラが大型であって葉食や草食を主として昆虫食が稀であり、チンパンジー属が果実食中心で昆虫を頻繁に食べることはこれまでの議論とうまく符合するように思われる。もちろんこれ以外に哺乳類や鳥類を食べる肉食を考慮しなくてはならないが、とくに類人猿からヒト化へと続く議論では大問題のひとつなので、ここではあえて取り上げないことにする。

これまで述べてきたヒト以外の霊長類に対して、わたしたちヒトという種は、赤道直下の熱帯から寒冷な北極圏まで、さらに湿潤な地域から年降水量が極端に少ないサバク地帯まで、ただひとつの種として分布しているという大きな特徴をもつ。大きく異なる環境に暮らしているヒトでも、身体的にはそれほど大きな差はないが、ヒトはその土地の気候風土に適した暮らしを営むことで、世界中に分布することを可能にしてきた。

現在のように貯蔵手段や交通機関が発達し、地球規模で食料が流通する以前には、それぞれの生態系で効率的に収穫できるものでヒトの食料が賄われていた。湿潤な熱帯から暖温帯にかけては、タロイモ、ヤムイモ、キャッサバのような根菜、あるいはコメをはじめとした穀類、バナナなどの果実などの植物を中心に、魚貝や鳥獣、昆虫などの動物を適度に加えた食生活を営む人々が暮らしていた。また、乾燥した冷温帯から亜寒帯、あるいは長く乾季がつづく乾燥地帯では、家畜の肉や乳を加工した食品を中心に食生活が組み立てられていた。一方、ほとんど植物が生えていない北極圏に住む人々は、もっぱら魚類やアザラシなどの海獣類を狩る生活を営んでいた。このように、その地域の生態系に根差したヒトの食生活は、人類の文化の多様性の源泉でもあった。

このなかで食べ物の違いというのは生業（なりわい）の違いを体現し、自らの文化を他と区別してアイデンティティを高めると同時に、しばしば他文化を貶（おとし）める働きをしてきた。ある文化で美食としてもてはやされる食材が、他の文化ではまったく顧みられないどころか嫌悪の対象になっていることはざらにある。生肉、生魚、あるいはクジラ、イルカ、イヌ、ウマ、ブタ、サル、カエル、ヘビ、カタツムリ、ほぼすべての発酵食品、ヒエ、アワなどの「雑穀」に至るまで、これらを食べるということが、これまでどれだけ他文化や社会的弱者を貶める罵詈雑言（ばりぞうごん）として使われてきたことだろうか。(3)食物ほどタブーと偏見に満ち満ちているものは見当たらないであろう。

そのなかで昆虫食もまた最大の嫌悪の対象となってきた。それには大航海時代以降、世界の価値を標準化してきたヨーロッパの価値観が大きく関係しているのは明白なように思われる。もともと高緯度に位置するヨーロッパでは、食用となる昆虫の多様性がイチジルしく低い。また早くから家畜の肉や乳を加工した食品を中心とする食体系が確立しており、タンパク質を他に依存する必要がそれほどなかった。それを補強したのが宗教的教義であろう。ちょうどイスラム教がブタやイヌ、鱗（うろこ）をもたない魚を穢（けが）れたものとしてきたように、キリスト教はミツバチを除いては、昆虫を祝福されたものとは考えていなかったようだ。旧約聖書レビ記に「翅（はね）を持ち、這（は）って歩く昆虫は全てお前たちを汚すエ」まわしいものである。それら昆虫の死体に触れた者は一日中汚れが取れない」という記述がある。キリスト教以後のヨーロッパ文明が昆虫を人間の食べ物として認めなかったため、全世界がヨーロッパ文明化していくなかで昆虫食は野蛮で原始的であるという汚名を着せられたせいではなかろうか。ちょうど日本でも明治になってヨーロッパ文明からみて男女混浴が後進的で野蛮なものとされて禁止されたように、昆虫食は急速にゲテモノ視されていったのではないかと考える。

しかしながら、このような時代の趨勢（すうせい）を変えるのではという動きがある。二〇一三年五月、国連の食糧農業機構は『食用昆虫――食料及び飼料の安全保障――』という報告書をまとめた。その内容は「将来、世界の人口増加によって、食料、とくに動物性タンパク質の不足が危惧（きぐ）される。そのときに備えて、昆虫食を新たなタンパク資源に考えるべきである」という提案である。アフリカや南米でブッシュミート[注二]の商業流通に伴う哺乳類の局所的な絶滅が現実のものとなっている現状を考えると、森林性の昆虫を

オさらにさもあらず」といひけれど、さらに聞かず。はては、ものいひふれむ人もなかりければ、よろづの言葉をひとりごちけれど、さらに答へする人もなかりければ、いひわびてぞ、いでて来にける。

さて、つとめて、時雨（しぐれ）ければ、男、かくいひやる。

(1)さ夜中に憂き名取川[注五]わたるとて濡れにし袖に時雨さへ降る

とある返し、

(2)時雨のみふるやなればぞ濡れにけむ立ち隠れけむことやくやしき

とありけるに、喜びて、またものなどいひやれど、いらへもせずなりにければ、いはでやみにけり。

（『平中物語』による）

注一　その人なり＝これこれというお方だ。

注二　女＝この「女」は、男が想う女とは別人を指す。

注三　見えしらがひ歩きける＝わざと目立つように歩きまわった。

注四　妻のつくりごとしたるなめり＝奥さんが計略をしたのでしょう。

注五　名取川＝宮城県名取郡を流れる川。「名取る（評判を取る、噂（うわさ）される）」と掛詞にして、歌によく詠まれた。

問一　傍線部**アイウエオ**を現代語訳しなさい。

問二　波線部について、「女ども」がこのような態度を取ったのはなぜか、説明しなさい。

問三　傍線部(1)の和歌について、男の心情を説明しなさい。

問四　傍線部(2)について、掛詞を明らかにしつつ、現代語訳しなさい。

食用として扱い、持続的に利用する道をもっとシンケンに模索すべきではないだろうかと。

（湯本貴和「昆虫食はなぜゲテモノ扱いされるのか」による）

注一　閾値＝「しきいち」とも読む。境目となる値。

注二　ブッシュミート＝野生動物の肉。

問一　傍線部**アイウエオ**のカタカナ部分を漢字に直しなさい。

問二　傍線部(1)について、「その道」の表す内容を明らかにしつつ、意味を説明しなさい。

問三　傍線部(2)について、中大型霊長類の「葉食」を可能とした条件を書きなさい。

問四　傍線部(3)のように筆者が主張する理由を述べなさい。

問五　将来の人口増加による食料不足に備えて、「ヒト」がタンパク資源として昆虫を食料とするためには、どのような課題があると筆者は考えているか、全体の主旨を踏まえてまとめなさい。

問題　三

次の文章は、『平中物語』の一節である。主人公の平貞文は、ある女に想いを寄せていたが、文をやり取りするまでには至っていなかった。貞文は、女に言い寄るつてを得ようと、日頃から女の家の前を行き来していたが、その機会はなかなか得られなかった。そんなある日の夜、女の元にいる女房たちと出会し、言葉を交わすこととなった。以下には、当日の夜及びその後のできごとが描かれている。これを読んで、後の問に答えなさい。

また、このおなじ男、聞きならして、まだものはいひふれぬありけり。アいかでいひつかむと思ふ心ありければ、つねにこの家の門よりぞ、歩きける。かうありけれど、いひつくたよりもなかりけるを、月などのおもしろかりける夜ぞ、かの門の前渡りけるに、女ども多くイ立てりければ、馬よりおりて、この男、ものなどいひふれけり。いらへなどしける、男うれしと思ひて、立ちとどまりにけり。この女ども、男の供なりける人に、「たれぞ」と問ひければ、「その人なり」注一とぞ答へけるに、この女ども、「音にのみ聞きつるを。いざ、呼びすゑて、ものいはむ」、「いかがあると聞かむ」とて、「おなじうは、この庭の月をかしきをも見せむ」といひければ、この男、「なにのよきこと」とて、もろともに入りにけり。女ども集まりて、簾のうちにて、「あやしう、ウ音に聞きつるが、うつつに、よそにても、ものをいふこと」と、男も女もいひかはして、をかしき物語して、女も注二、心つけてもの いふありけり。

集まりてものいふなかに、男も、あやしく、うれしくて、いひつきぬることなど思ひてをりけるほどに、この男の乗れる馬、ものに驚きて、引き放ちて、走りければ、わらはべみな馬につきていにければ、わらは一人ぞ、とどまりて、注三見えしらがひ歩きける。されば、この男、エかたはらいたがりて、招きて、「なにごとぞ」といひければ、されば、「早う隠れよ」とて、追ひ込めてけり。それを、この女ども、「なにごとぞ」と問ひければ、「なにごとにもあらず、馬なむものに驚きて放れにける」と、男答へければ、「いな、これは、夜ふくるまで来ねば、注四妻のつくりごとしたるなめり」、「あな、むくつけ。はかなきたはぶれごとさへ、いふ妻持たらむものはなににかすべき」と、心憂がり、ささめきて、みな隠れぬ。この女どもに、この男、「あな、わびしや。

問題　二

役人から追われている国定忠次は、意中の子分だけを連れて逃げようと考えたが、今まで苦労をともにして来たことを考えるとそのことが言い出せなかった。そこで忠次は、子分を選りすぐるために入れ札を提案し、子分たちも納得した。以下の文章を読んで、後の問に答えなさい。

先刻からの経路を、一番厭な心で見ていたのは稲荷の九郎助だった。彼は年輩から云っても、忠次の身内では、第一の兄分でなければならなかった。が、忠次からも、子分からも、そのようには扱われていなかった。去年、大前田の一家と一寸した出入りのあった時、彼は喧嘩場から、不覚にも大前田の身内の者に、引っ担がれた。それ以来、彼は多年培っていた自分の声望がめっきり落ちたのを知った。自分から云えば、遥かに後輩の浅太郎や喜蔵に段々凌がれて来た事を、感じていた。そればかりでなく、十年前までは、兄弟同様に賭場から賭場を、一緒に漂浪して歩いた忠次までが、何時となく、自分を軽んじている事を知った。皆は表面こそ「阿兄！　阿兄！」と立てているものの、心の裡では、自分を重んじていないことが、ありありと感ぜられた。

入れ札と云う声を聴いたとき、九郎助は悪いことになったなあと思った。今まで、表面だけはともかくも保って来た自分の位置が、露骨に崩されるのだと思うと、彼は厭な気がした。十一人居る子分の中で自分に入れてくれそうな人間を考えてみた。が、それは弥助の他には思い当らなかった。弥助も九郎助と同様に、古い顔であって、後輩の浅太郎や、喜蔵などが、グングン頭を擡げて来るのを、常から快からず思っているから、こうした場合には、きっと自分に入れてくれるだろうと思った。が、弥助だけは自分に入れてくれるとしても、弥助の一枚だけで、三人の中に這入ることは考えられなかった。浅太郎には四枚入るだろうと思った。喜蔵に三枚入るとして、十一枚の中、後へ四枚残る。その中、自分の一枚をのけると三枚残る。もし、その中、二枚が、自分に入れられていれば、三人の中に加わることは出来るかも知れないと思った。が、弥助の他に、自分に入れてくれそうな人は、どう考えても当てがなかった。ひょっとしたら、並川の才助がとも思った。あの男の若い時には、かなり世話を焼いてやった覚えがある。が、それは六、七年も前のことで、今では「浅阿兄、浅阿兄」と、浅にばかりくっ付いている。そう思うと、弥助の入れてくれる一枚の他には、今一枚を得る当ては、

問一　空欄A・Bに適切な語句を入れ、「顔」に関する慣用的な表現を完成させなさい。

問二　傍線部(1)について、なぜそのような気持ちになるのか、分かりやすく述べなさい。

問三　傍線部(2)について、「苦い悔悟」とは何か、分かりやすく述べなさい。

問四　傍線部(3)について、この時の忠次の気持ちはどのようなものか、述べなさい。

問五　傍線部(4)について、九郎助のどのような心情がうかがえるか、分かりやすく述べなさい。

どうにもつかなかった。子分の中で年頭でもあり、一番兄分でもある自分が、入れ札に落ちることは——自分の信望が少しも無いことがまざまざと表れることは、もう既定の事実のように、九郎助には思われた。(1)不愉快な寂しい感じに堪えられなくなって来た。

一本しか無い矢立[注二]の筆は、次から次へと廻って来た。

「おい！　阿兄！　筆をやらあ」

ぼんやり考えていた九郎助の肩を、つつきながら横に居た弥助が、筆を渡してくれた。弥助は筆を渡すときに、九郎助の顔を見ながら、意味ありげに、ニヤリと笑った。それは、たしかに好意のある微笑だった。「お前を入れたぜ」と云うような、意味を持った微笑であるように九郎助は思った。そう思うと、九郎助は後のもう一枚が、どうしても欲しくなった。後の一枚が、自分の生死の境、栄辱の境であるように思われた。忠次に付いて行ったところで、自分の身に、いい芽が出ようとは思われなかったが、入れ札に洩れて、年甲斐もなく置き捨てにされることがどうしても堪らなかった。浅太郎や喜蔵の人望が、自分の上にあることが、マザマザと分かることが、どうしても堪らなかった。

かれは、筆を持ってぼんやり考えた。

「おい！　阿兄！　早く廻してくんな！」

横に坐っている浅太郎が、彼に云った。阿兄！　と云いながらも、語調だけは、目下を叱しているような口調だった。九郎助は、毎度のことながらむっとした。途端に、相手に対する烈しい競争心が——嫉妬がムラムラと彼の心に渦巻いた。

筆を持っている手が、少しブルブル顫えた。彼は、紙を身体で掩いかくすようにしながら、仮名で「くろすけ」と書いた。

書いてしまうと、彼はその小さい紙片をくるくると丸めて、真中に置いてある空になった割籠[注三]の蓋の中に入れた。が、入れた瞬間に、(2)苦い悔悟が胸の中に直ぐ起った。

「博打は打っても、卑怯なことはするな。男らしくねえことはするな」

口癖のように、怒鳴る忠次の声が、耳のそばで、ガンガン鳴りひびくような気がした。彼は皆が自分の顔を、ジロジロ見ているような気がして、どうしても顔を A ことが出来なかった。

忠次は、振り向きながら、時々、被っている菅笠を取って振った。その長身の身体は、山の中腹を掩うている小松林の中に、暫くの間は見え隠れしていた。

取り残された子分達の顔には、それぞれ失望の影があった。

「浅達が付いていりゃ、大した間違いはありゃしねい！」

口々に同じようなことを云った。が、やっぱり、銘々自分が入れ札に洩れた淋しさを持っていた。

が、忠次達の姿が見えなくなると、四、五人は諦めたように、草津の方へ落ちて行った。

九郎助は、忠次と別れるとき、目礼したままじっと考えていた。落選した失望よりも、自分の浅ましさが、ヒシヒシ骨身に徹えた。札が、二、三人に蒐まっているところを見ると、みんな親分の為を計って、浅や喜蔵に入れたのだ。親分の心を汲んで、浅や喜蔵を選んだのだ。そう思うと、自分の名をかいた卑しさが、愈々堪えられなかった。

朝の微風が吹いて来て、入れ札の紙が、熊笹を離れて、ひらひらと飛びそうになった。

「ああ、こんなものが残っていると、とんだ手がかりにならねえとも限らねえ」

そう云いながら、九郎助は立ち上って散らばっている紙片を取り蒐めると、めちゃめちゃに引きちぎって投げ捨てた。(4)九郎助の顔は、凄いほどに蒼かった。

（菊池寛「入れ札」による）

注一　出入り＝喧嘩のこと。

注二　矢立＝江戸時代に使われた、携帯用の筆記具。

注三　割籠＝弁当箱。

注四　壺皿＝博打で、さいころを入れて伏せるのに用いる器。

吉井の伝助は、無筆だったので、彼は仲よしの才助に、小声で耳打ちしながら、代筆を頼んだ。

皆が、札を入れてしまうと、忠次が、

「喜蔵！　お前読み上げてみねえ！」と言った。

皆は、緊張のために、眼を輝かした。過半数のものは諦めていたが、それでも銘々、うぬぼれは持っていた。注四壺皿を見詰めるような目付きで、喜蔵の手許を睨んでいた。

「あさ、ああ浅太郎の事だな、浅太郎一枚！」

そう叫んで喜蔵は、一枚、札を別に置いた。

「浅太郎二枚！」彼は続いてそう叫んだ。

又、浅太郎が出たのである。浅太郎が、この二、三年忠次の信任を得て、影の形に付き従うように、忠次が彼を身辺から放さなかったことは、子分の者が皆よく知っていた。(3)浅太郎の声がつづくと、忠次の浅黒い顔に、ニッと微笑が浮んだ。

「喜蔵が一枚！」

喜蔵は、自分の名が出たのを、嬉しそうに、ニコリと笑いながら叫んで、

「嘘じゃねえぞ！」と、付け足しながら、その紙を右の手で高く上げて差し示した。

「その次が又、喜蔵だ！」

喜蔵は得意げに、又紙札を高く差し上げた。

「嘉助が一枚！」

第三の名前が出た。忠次は、心の中で、私に選んでいる三人が、入れ札の表に現れて来るのが、嬉しかった。子分達が自分の心持ちを、察していてくれるのが嬉しかった。

「何だ！　くろすけ。九郎助だな。九郎助が一枚！」

喜蔵は、声高く叫んだ。九郎助は、顔から［　B　］ように思った。生れて初めて感ずるような羞恥と、不安と、悔恨とで、胸の

裡が掻きむしられるようだ。自分の手蹟を、喜蔵が見覚えては、いはしないかと思うと、九郎助は立っても坐っても居られないような気持ちだった。が、喜蔵は九郎助の札には、こだわっていなかった。

「浅が三枚だ！　その次は、喜蔵が三枚だ！」

喜蔵は大声に叫びつづけた。札が次々に読み上げられて、喜蔵の手にたった一枚残ったとき、浅が四枚で、喜蔵が四枚だった。嘉助と九郎助とが、各自一枚ずつだった。

九郎助は、心の裡で懸命に弥助の札が出るのを待っていた。弥助の札が出ないことはないと思っていた。もう一枚さえ出れば、自分が、三人の中に入るのだと思っていた。

「さあ！　みんな聞いてくれ！　浅と喜蔵とが四枚だ。嘉助が二枚だ。九郎助が一枚だ。疑わしいと思う奴は、自分で調べて見るといいや」喜蔵は最後の決定を伝えながら、一座を見廻した。

誰も調べて見ようとはしなかった。誰よりも先に、九郎助はホッと安心した。

忠次は自分の思い通りの人間に、札が落ちたのを見ると満足して、切り株から、立ち上った。

「じゃ、みんな腑に落ちたんだな。それじゃ、浅と喜蔵と嘉助とを連れて行こう。九郎助は、一枚入っているから連れて行きたいが、最初云った言葉を変改することは出来ねえから、勘弁しな。さあ、先刻からえろう手間を取った。じゃ、みんな金を分けて銘々に志すところへ行ってくれ」

子分の者は、忠次が出してあったうちから、銘々に十二両ずつを分けて取った。

「じゃ、俺達は一足先に行くぜ」忠次は選まれた三人を、差し招くと、みんなに最後の会釈をしながら、頂上の方へぐんぐんと上りかけた。

「親分、御機嫌よう。御機嫌よう」

去って行く忠次の後から、子分達は口々に呼びかけた。